

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	管 27K05	氏 名	川井 弾
研究主題 —副主題—	オリンピック・パラリンピック教育の単元計画の作成 —クロス・カリキュラムの手法を活かして—		
所属校	町田市立南第四小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	<p>本研究は、東京都教育委員会が推進している「オリンピック・パラリンピック教育」（以下「オリ・パラ教育」）の実践に向け、児童と教員に意識調査を実施し、クロス・カリキュラムの手法を用いて、「オリンピック・パラリンピック学習プログラム」を作成することとした。</p> <p>また、「オリンピック・パラリンピック学習プログラム」を実施することで、児童が、オリンピック・パラリンピックに対する期待をもち、意欲的に参加（する・見る・支える）しようとする積極的な気持ちをもつことができたかを明らかにすることとした。</p>
II 研究の方法	<p>1 実態調査</p> <p>今回の研究を進めるにあたって、児童に「オリンピック・パラリンピック」についての意識調査、教員の「オリ・パラ教育に関する指導」についての意識調査を行った。</p> <p>(1) 児童の「オリンピック・パラリンピックについて」の意識調査</p> <p>① 全体について</p> <p>② 東京オリンピック・パラリンピックへの参加の意識について</p> <p>(2) 教員の「オリンピック・パラリンピック教育に関する指導」についての意識調査</p> <p>① 「オリ・パラ教育」の実施の実態について</p> <p>② 「オリンピック・パラリンピックそのものについての学び」に関する指導について</p> <p>③ 「オリンピック・パラリンピックを通じた学び」に関する指導について</p> <p>④ 「オリ・パラ教育」を実施する教科・領域について</p> <p>2 「オリンピック・パラリンピック学習プログラム」の試案作成</p> <p>児童アンケートから、現在のオリンピック・パラリンピックへの知識に関する状況や課題を見付け、それを「オリンピック・パラリンピック学習プログラム」の重点指導項目とする。また、教員アンケートから、オリ・パラ教育を展開していく上での課題と、学習プログラムをどの教科・領域で取り組むかを検討し、プログラム作成の参考とする。その際はクロス・カリキュラムの手法で作成する。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>(1) 児童・教師への「オリ・パラ教育」への実態調査（都内公立小学校4校）  第5・6学年の児童に「オリンピック・パラリンピック」についての意識調査を行い『オリンピック・パラリンピックの大会の意義』『障害者スポーツへの理解』『開催国としてのバリアフリー施設も含めた環境作り』についての知識・理解が低いことが分かった。  また、教員の「オリ・パラ教育に関する指導」についての意識調査を行った。『オリンピック・パラリンピックの概要を指導できる教材作り』『障害者スポーツの理解を図る単元設計』『さまざまな教科、領域の特性をとらえクロス・カリキュラムの手法を活用した学習プログラムの構築』が課題をして挙げられた。</p> <p>(2) 「オリンピック・パラリンピック学習プログラム」の試案作成  オリンピック・パラリンピック大会の意義の理解、オリンピック精神である「スポーツへの主体性」「他者への尊厳」「共生社会への理解」の育成、パラリンピックを通じた障害者スポーツへの理解、開催国としての「異文化コミュニケーション能力」の育成を目指し、「体育科」を中心に、「道徳」「社会」「総合的な学習の時間」を含む、三つの学習プログラムを作成した。</p> <p>I 「オリンピック・パラリンピックを知ろう」  【道徳、社会、総合的な学習の時間】</p> <p>II 「パラリンピックの競技を体験しよう」【体育、総合的な学習の時間】</p> <p>III 「世界中の人々をお迎えしよう」【総合的な学習の時間】</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>○「オリ・パラ教育」を行う上で、児童のオリンピック・パラリンピックについての興味・関心を正確に把握することで、「知識として学ばせたいこと」と「学習を通じて学ばせたい価値観」を明確にし、教科・領域の特性を考慮し、複合的に組み合わせた教育活動が実施できた。</p> <p>○本研究で作成した「オリンピック・パラリンピック学習プログラム」は、クロス・カリキュラムの手法を用いることで、体育科を中心に、複数の教科・領域の特性をできる限り損なわずに作成できることが示されたと言える。</p> <p>○パラリンピックへの理解について、本研究では「シッティング・バレーボール」を実際に体験することによって、知識や理解を意欲的な興味・関心へ効果的につなげられることが、児童への事後の意識調査からも示された。</p> <p>○本研究の取組は児童にオリンピック・パラリンピックへの関心をもたせることができ、自分で更に新たな課題を見出すなど、「オリンピック・パラリンピック」について自主的な取組に発展させることができた。また、児童は、オリンピック・パラリンピックに対する期待をもち、意欲的に参加（する・見る・支える）しようとする積極的な気持ちをもつことができた。</p>